



やまだ 民児協だより

〈第5号〉

発行者 草津市山田学区民生委員・児童委員協議会

介護保険を支える、地域の見守り体制を

山田学区民生委員児童委員

副会長 三戸清利

介護保険制度がスタートして、半年が経過しました。

社会の高齢化が急速に進み、介護を必要とする高齢者数の急増が予想されており、要介護高齢者の中の約75%の方が1年以上の寝たきり状態になるといわれています。

こうした高齢期の大きな不安要因である介護の問題を社会全体で支えるべく創設されたのが介護保険制度です。

これまで、福祉と保険・医療がそれぞれの分野で実施してきた介護にかかるサービスを一体化したもので、利用者の希望が尊重され、家族にかかる介護負担を軽減し、介護を社会全体の問題としてとらえ最適なサービスの提供を、この制度は目的としています。

保険料、サービスの地域格差や介護度認定結果の矛盾など、この制度は多くの課題を抱えていることは、周知の通りです。

さて、介護保険にかかる民生委員の役割は、制度の周知と利用促進の側面からの支援、本人や家族

が申請できない場合、また介護保険にかかわる苦情を行政への確につなげることなどあります。

この制度の介護サービスを受けたい場合、本人または家族が市町村に直接申請手続せねばなりませんし、認定結果は非公開が原則です。利用者の個人情報保持が尊重されることとなります。

本人からの申請、市町村職員（ケアマネジャー）による訪問調査、医師の意見書をもとに介護認

定審査会で要介護認定が判定となり、本人と行政の間で内密に認定判定となるわけです。そこで注意せねばいけないことは、介護を必要としながら、申請もれする人たちをどのように探すかということになります。

こうした問題の解決には民生委員の今までに増した地域の見守り活動強化が必要となつてきます。

介護サービスの受給を必要とする人々が、もれることなく保険制度の恩恵が受けられるよう、地域住民と民生委員の連携のとれた、地域の見守り体制の確立こそ今、地域に最も必要なことだと思いません。



今、思うこと

堀井 勢津子

今年五月、愛知県で高三男子が「人を殺す経験をしてみたかった」と主婦を刺殺。佐賀市の少年が、バスジャックの末、乗客の女性を殺害。岡山県でも、金属バットで下級生を殴り、母親を殺害。

栃木県の少年グループによるリンチ殺人。山口県で借金の使い道で口論の末、母親を殺害。等々、少年達の凶悪事件にただただ驚くばかりです。

これらの事件に共通している事は、「キレた」「カッとなった」等、衝動的で、信念がなく、罪悪感もなく、親や友人の命を簡単に奪ってしまった事です。

私の父は、パーキンソン症候群という難病で長年患っておりましたが、この四月に肺炎を起し、他界致しました。亡くなるまでの半年余り、生活を共にした中で、最後まで自分の残された機能を維持する事、感謝の気持ちを持ち続け、自分らしく生き抜いた父は、命の尊さ、重さを私達に教

え、伝えてくれました。身近な者の死により、私は「死」についてよく考えてしまいます。考えれば考える程、残され

た時間を精一杯の様に生きるのか、「生」に通じてしまうのです。

今の社会、人間関係が希薄にな



写真は本文とは関係ありません。

り、家族や地域の結びつきが弱く、子どもの孤立感が高まっているといわれています。今、思う事は、親だからこそ、遠慮なくしかり、言いきかせて、親と子が密着して過ごす時間を大切に、子どもに孤立感を与えない。また、家族と心がつながっていれば、思いやりや、優しさ、感謝や尊敬といった感性も自然に身につくのではないのでしょうか。

少年達の起す悲惨なニュースを見る度に、残された家族の悲しみ、苦しみや痛みのわかる人に育ってほしいと願って止みません。

地域での取り組みも、様々な視点から、活発に活動が行なわれております。地域協働合校や、わんぱくプラザ山田 etc...。参加する事で、人と人、地域のつながりをより深めていただければと思います。

私達、民生児童委員としても、「心豊かな子どもを育てる」という子育て支援から、高齢者福祉など、日々にお手伝いしていきたいと思っております。

歯医者さんの診察室

自然体でいこう

田 淵 稔 子

皆さん、今日は。本当は、歯医者さんの診察室での患者さんとのステキなコミュニケーションのお話を書きたかったのですが、私の失敗談をお話します。

私も齢を重ね五十路半ば、先ずは眼の衰えが確実にやっつて参りました。もともと近眼だから老眼はまだまだ先のことと構えておりました。それに加え右肘関節の痛み、少しエエ表現ですが、仕事で右手の使い過ぎでは? :

その他諸々、体の変調がちらほらと嫌ですね。職場の若い同僚の澁刺とした動き(少しは田淵先輩への対抗意識から?)、それとも性格なのか)をみていますと、「あんなに気忙しく動かなくても、私の方も気が焦ってしょうがないやんか」と、心の内で呟き、まるでせかさされる感じで、嫌な思いだけが湧いてきて、少しゆとりをもてばよいのに:との思いで、日々の仕事に関わってきました。そんなある日、落ち着いてやっついている様

にみえた私が、先生の新品のデジタルカメラを70〜80センチの高さから床の上にガチャン!

その時の私の驚きと焦りは通常ではありませんでした。先生の驚きも怒りも相当だったと思いません。感情を表に出さず点検をしながら「大丈夫だよ、今のカメラは落とした位ですぐ壊れる物ではないから。それに保証期間中だし:。」と、心配顔に私に平常心で

応えてくれましたが、内心穏やかではなかったと思います。その夜、ご自宅に再度謝ろうと電話をしましたところ、奥様が出られ、私の不安を取り除く優しい言葉をかけて頂き、その上慰めや励まし



婦の心配りや気遣いに感謝の念でいっぱいになりました。私自身も加齢に伴う心身の変化をしつかりと自覚し、今までの様に院内全体を把握するのではなく、任せられるところは任せ自然体でゆけばイ

学校教育について

木 村 政 信

今の子どもたちには相談できる相手や語り合える場が本当にならぬという点です。

一人の子どもと向き合う時間を十分とすることはできないし、家庭では一家団らんのひとつときもできなくなってきたこと、子ども

もが多様化してきて子どもはほとんど成長するのに教育に目がとどかない。参観日には両親や祖母、兄弟、だれでも見に来てもらい、来られない時は次の機会にと言えば子どもの心もやわらくと思ふのです。両親のそろっている人たちは何でもないが、両親のない子どものことも考えられているのでしょうか。学校側は、子どもの心

いや、自分に与えられた仕事を消化し、気負わずに過ごすようにしよう。と言いつつも、少しは頑張る私かな?。例のデジカメ、故障もなく無事でした。ホッ!

の底まで気を配ってやっつてほしいと思います。社会のままで子どもをとられない家庭と学校が一体となった学校教育こそ、いま求められているのではないのでしょうか。



みんなで育てる山田の子

堀井 とみ子

主任児童委員という仕事もちながら、なかなか子どもと接する機会のない私に、この夏、『公民館の家・体験合校Ⅱやまだアドベンチャーハウス』に参加でき、貴重な体験をすることができた。

山田学区の四、五、六年の三十

四名の子どもたちは、地域の人たちや公民館利用団体のかたがたにお世話になりながら、公民館で三泊四日、寝食を共にし、いろんな体験をした。

この酷暑の中、漁船にのって漁業体験、湖岸のゴミ拾い、立命館

大学でアメフトの体験、昔すいとんをいただき、昔

の話聞く、粘土制作、交通・社会ルール学習、ニュースポーツ体験をした。自ら夕食の献立を考え、買物をし、調理しておいしくいただくこともできた。夜は、きもだめし大会、マジック、ちぎり絵、水墨画、書、星の観察等、数多くの活動をスケジュールに沿ってやっていった。

特に男の子は、屋外の仮設のお風呂に喜んで入り、日頃味わえない気分を満喫していた。

ある晩、お風呂の終わった子のバスタオルを洗い、干していたら、「もうちゃんと干してくれてはる。ありがたいなあ。」と言つて通りすぎた子どもがいた。

また、朝食の後、時間が足りず、食器を洗わなくてよい時、「今日は洗わなくてよいの。ありがとう。」と、どの子ども大きな声で心をこめてお礼を言っていた。

いつもは、家族のだけれがしていても、当たり前と思っていた行動に感謝の気持ちを出したので、やっていく者もうれしい気持ちになつてきた。

最終日の『お世話になつた人に絵手紙を書こう』では、子どもたちの素直な感謝の気持ちが絵と文で表わされ、とても素晴らしい絵手紙ができあがつた。

開校式での教育長の挨拶の中で「集団生活で仲よくするということは、きまりを守ること。わがままをしないで我慢すること。が大事である。」と言われたが、子どもたちは、このことをしっかりと受けとめ、最後まで頑張つたんだなと思ひ、心から拍手を送らずにはいられなかった。本当に暑い中なので大変だったが、大人も子どもも心が通じ合ひ、共に楽しみ、

高め合うことができ、よい思い出となつた。

このように、小さい頃、育つた地域での感動や体験が成長の軸となつて、大人までつながっていくものと思われる。そこで、家庭・学校・地域が一体となつて『ふるさとの心が育つ地域』にしていき、子どもたちの健やかな成長を願うところである。

編集後記

今年度もやまだ民児協だよりをお届けさせて頂きます。

ことわざに、見ざる・聞かざる・言わざるといふのがあります。3匹の猿がそれぞれの姿に彫られた置物は有名です。余計なことを見たり、聞いたり、言ったりしないで知らない顔をしているのが無難だという処世訓です。

このことわざに一理はありますが、私たちの日常生活において不可能に近いと言えましょう。お互いに相手の立場を尊重して意見を言うことも大切ではないでしょうか。



写真は本文とは関係ありません。